

## 論文の要旨

本論文は、唐代の詩人杜甫（七一二～七七〇）の詩について、政治との関わりや韻律の問題を鍵に考察を加えるものである。全体は三部構成からなる。

第一部は、「杜甫における政治と文学」と題する。

第一章「杜甫と孟雲卿」では、社会詩の傑作として評価される五言古詩「三吏三別」は、その制作の背景や目的に政治を志す士大夫階級としての使命と詩人としての自負が込められた作品であったことを尚古派詩人の孟雲卿との関わりを軸として論じる。杜甫が政治観、文学観を共にすると信じた尚古派官僚に繋がって中央官界に復帰し、自己の政治理念の実現を果たすために制作を意図した「行卷」としての「三吏三別」は、杜甫の意図とは裏腹に、政治的にも文学的にも杜甫に自身の孤立状態を深く認識させる結果となった。この後、杜甫は尚古派を頼りに「棄官」し、秦州に活路を見いだそうとするが、官界から退くことは杜甫の政治的文学的理想の実現という観点から考えると大きな後退であった。杜甫は何の意図もなく衝動的に職を抛つことをしたのではなく、暫く左遷された一派に従い隠棲する中で活路を見出そうと意図していた可能性が考えられる。

第二章「「立秋後題」考」では、杜甫が棄官に際して制作した「立秋後題」は陶淵明の故事に倣い自ら設定した虚構の上に作られたものであることを宋代以降の諸註の判断も踏まえながら論じる。杜甫の棄官は自らの意志による能動的なものであり、陶淵明に倣って隠遁生活に入るという希望的判断があった。その背景には、杜甫が目指した秦州には、尚古派に関わる官僚や文化人たちも中央から遁れているという事実があり、おそらく杜甫は隠遁生活を俗世界との関係を断ち切ったものとしては捉えずに、隠者として名を成すことによって却って現実に繋がる（いずれ官界に復帰できる）と考えていたのだろう。しかし、杜甫の思惑に反して、棄官後の生活は殊の外厳しく、杜甫は生きてゆくための方途を模索せねばならなかった。五言律詩「秦州雜詩二十首」はこのような杜甫の内面の苦悩を象徴するものであり、新たな詩律の模索の契機となった可能性を提示する。

第三章「杜甫における「政治」と「文学」」では、前二章で述べた尚古派官僚や詩人との関わりを、杜甫の「政治」と「文学」に対する認識と行動の観点から詳細に検討する。杜甫は中央政界で力を持つ様々な人々と関わりを持って自作の詩文を示し、文学的才能を評価されることによって官職を得ることができた。しかし、安史の乱に伴う政権抗争が起こり、尚古派とともに杜甫も左遷され、棄官を余儀なくされる。この後、晩年になっても杜甫と尚古派詩人との関わりは続いていた。中央官界復帰への望みが完全に絶たれた状況においても、尚古派の詩人たちとの関わりを求めていく杜甫の文学に対する姿勢は、「文学」を単純に「政治」参画の為の道具とする認識から、生涯を懸けて「文学」の価値と芸術性を追い求める姿勢へと変化を遂げていったと考えられる。また、杜甫が詩を伝えた王季友は、後に「大曆の十才子」と呼ばれる錢起や郎士元とも関わりをもっており、さらに王季友が関わりをもつ趙微明、于逖、元季川らは、獨孤及や皇甫曾、皇甫冉ら次代の古文運動に影響を与え発展させていくグループとも関わりを

もっていることから、杜甫の詩的変革を唐代古文運動の流れの中に位置づけて考えてみることは価値ある視点となると論じる。

第二部は「杜甫の詩家自覚と新しい詩の試み」と題する。

第四章「杜甫と郎官」では、杜甫は生涯「詩」の可能性を追究し続けた稀有な詩人であり、その死に至るまで詩型、詩律に対して挑戦的な試みを続けたことを論じる。また同時に杜甫が成都出立後、絶筆に至るまで言及しつづけた官職に関する語（「郎官」等）を手掛かりにして、晩年における杜甫の官職への執着と生活の関係と詩作への意識についても考察を加える。郎官就任を目標に長安を目指したが、病や戦乱に翻弄され様々な人々に生活の援助を頼るという困難な状況に陥った杜甫を支えたのは「自分は郎官に任命された者である」という強烈な自負心と、「郎官」の名称を直接的にあるいは間接的に生活の糧を得る手段として最大限に活用した杜甫の強かさであった。生活困窮の状況における生活力と、困難に挑戦し続けることが生きる糧となるという逆説的な詩作意欲は、挑戦することによって新しい自己を開拓していこうとする杜甫の性格に由来する。杜甫の最終目的は、詩人として自分の詩を後世に伝えることであり、杜甫にとって残されるべき詩は、詩律との格闘によって生まれるものであったと結論づける。

第五章「夔州における杜甫「拗体七律」の試み」では、近体詩の完成者と称される杜甫が最晩年期になぜ破格とされる拗体の七言律詩を多作したのか、その意図と目的について考察し、拗体七言律詩の試みは、新しい自己の文学観を他の詩人に示すことを目的として、詩人としての自覚に基づいた新たな詩律の可能性（近体七律に古体詩の要素を加味すること）を示すものであったと結論づける。更に、七言詩に新たな創作の可能性をみつけたのは、一つは七言という形式が古来よりの民間の芸能、民謡、歌謡の基本的スタイルをもつこと、また夔州が杜甫が生まれ育った土地とは異質の文化・民俗をもつ土地であり、それらが杜甫に強い刺激を与えたこと、もう一つは七言が公的なものからの逸脱を意味し、郎官就任と帰郷の夢が絶たれた杜甫が見つけた詩の可能性、民間にあって「詩家」として自らの詩を残し伝えていくという決意表明であり、それは次代の白居易や元稹の「新楽府運動」へと続く架け橋となっていくと論じる。

第三部は「杜甫の評価—新しき文学観の継承—采詩・詩家自覚・異文化への眼差し・次世代への継承」と題する。

第六章「韋莊編『又玄集』中の杜詩七首について」では、韋莊編『又玄集』所収の杜甫の七首は、韻律や平仄においては、「清詞麗句」の模範とすべきものであったことを『又玄集』序の読解と杜甫の詩七首の分析により論ずるとともに、韋莊が杜詩の採録にあたり破格の詩作をどのように評価したのかについて考えるためには、晩唐期の杜詩の流布状況と『又玄集』所収の他の詩作品の詩律の分析が必要なことを課題として提出する。

第七章「杜甫の「詩家自覚」異論」では、杜甫が後世に詩を残すために行った措置の可能性について論じる。幾つかの可能性が考えられる中で、「①子どもに託すこと」、「②家族に託すこと」、「③家族を増やすこと」の三つが考えられ、それぞれの可能性の実現に向けて、杜甫が当時の社会情勢や息子たちの特性を見極めて、その時点での選択肢を考慮しつつ、死に至るまで「詩を残すため」の行動を続けたことを述べた上で、この杜甫の行動の根底が「詩家自覚」で

あり、それが最終的に自身の「詩集」を後世に残し、伝えることを実現させたと論じる。

結語では、儒家思想に裏付けられた政治参画への強い意志を持ちながらも時代状況に翻弄された人生を過ごした杜甫が、詩の可能性を信じ文学の力を根底に据えて誠実に人生の課題に取り組んで生きたこと、迫り来る困難に対して自身の殻に囚われない柔軟な考え方と困難を肯定的に捉える思考ができる人物であったこと、杜甫の詩が残り後世に伝えられた背景の一つに、杜甫自身のアンバランスでアンビバレントなものの見方や認識と、文学の力と詩の可能性を信じ切った行動が背景にあったと結論づけ、この視点は今後の杜甫研究をすすめるにあたっての手掛かりの一つとなる可能性があるとは指摘する。